

テクノロジーが僕のためにある程度選択をしてくれるのはありがたい

このアルバムのために
書き下ろした曲は無いんだよ

◆最新アルバムでアンジェラ・ジェイガーと共演したいきさつから聞かせてください。

◇実は今回共演の話が来るまで、彼女のことは知らなかった。彼女と知り合ったのは、ジョン・タイという知人を通じてだ。ロンドンでスクラッチというクラブを経営してレーベルも持っているやつなんだけど、彼女がアンジェラのデモ・テープを聴かせてくれたのさ。聴いてみるとなかなか面白かったので、お互い連絡を取りだしたんだ。彼女のデモには、詞だけが決まっていたそれをインプロバイズして歌ったものが入っていた。同じ言葉に幾通りかの節が付いていたんだよ。

最初に2人で僕の自宅スタジオに入ったときもそのデモのやり方でやってみただけど、これは必ずしもうまくいくとは限らないと想像できるだろう？ 実際悲惨だったよ。好きに歌わせると、たった1曲がどんどん長くなるだけでね。やっててちっとも楽しくなかった。そしてその惨状が2日半続いたんだ。最後の最後になって彼女にヘッドフォンをかけさせ、キーボードの前に座らせてマイクをセットしてみた。そして僕が作ったDATを流し、それをバックにして好きに歌ってもらったんだ。ほとんど即興的なライブで、アンジェラもやっとなじめるようになったんだよね。

◆その2日半であきらめなかったからこそ、この素晴らしいアルバムができたんですね。

◇お互いに先入観がほとんど無かったのが良かったのかもね。少しだけあった先入観が、きっかり2日半ぶんの無駄として現れたようにも思えるな。その後うまくいきだしてからは、プロジェクトが自ら方向性を見出していったみたいだった。そこから先、僕は彼女が感情移入して歌えそうな曲をDATでかけていけばよかった。このようにお互いをよく知りあい、良いところを見つけるには、多少の間違いが役に立つこともあるのさ。

◆彼女に聴かせた曲はどういう内容のものだったんですか？

◇DATは棚から引っぱり出てきたもので、過去に手がけた幾つかのプロジェクトで使った音楽が入っていた。例えば、オイディプス劇のバックを2週間ライブで務めたときに自分用に録っておいたものとかね。劇のバックだから毎晩同じことの繰り返しで、面白いものじゃないんだけどテープはたくさん残ってたんだ。それから1994年にターナー賞（イギリスの芸術作品に贈られる賞）候補の画家3人と彫刻家を集めたTV番組の音楽を担当したときもあったな。その他すべて“ありもの”を利用したから、このアルバムのために書き下ろした曲は無いんだよ。

◆レコーディングはどういった手順で？

◇DATと一緒にアンジェラが歌ったものを、タイム・コードを付けてオープン8tr MTRに入れていったんだ。でもボーカルは、多くて3テイクくらいしかレコーディングしなかったな。インプロビゼーションの場合は、それ以上録っても良くなることはまず無いからね。それから彼女の歌とタイム・コードをProToolsに移し、そこでエディットやミックスをした。バック・トラックはレコーディングの際一緒にMTRに入れたんだけど、

interview

david cunningham

デヴィッド・カニンガム

photo: takashi yashima
interpretation: kayoko takahashi

ディス・ヒートのプロデューサー、フライング・リザーズのオーガナイザー、そしてマイケル・ナイマンのプロデューサーなどの多彩な顔を持つデヴィッド・カニンガムの新作は、女性ボーカリスト、アンジェラ・ジェイガーとの共作名義。シドニー・ピエンナーレにサウンド・インスタレーション作品を出品する途中日本に立ち寄った彼に、チャールズ・ヘイワードも参加した新作の制作過程について聞くことができたのでお届けしよう。



『artificial homeland』
angela jaeger
david cunningham
(piano 509 / 輸入盤)

- | | |
|-----------------------|-------------------------------|
| 1 a silver thread | 9 only for you |
| 2 artificial homeland | 10 blue gold seven |
| 3 beyond that star | 11 forsythia |
| 4 wood and glass | 12 the hot day |
| 5 fortuna | 13 time can make a difference |
| 6 turning left | 14 radioloop |
| 7 made of sand | 15 river west |
| 8 unlock the hills | |

[M]アンジェラ・ジェイガー (voices)、デヴィッド・カニンガム (instruments)、
チャールズ・ヘイワード (ds)
[P]デヴィッド・カニンガム [E]デヴィッド・カニンガム、アンジェラ・ジェイガー

ミックス・ダウン時にDATからProToolsにデジタルで送り直したんだ。タイム・コードが入っているから、最後に同期させるのも簡単だったよ。ただMTRの調子が変わったために逆相になって、「ひゅーん」なんて変な音が入っているところはそのまま残したりはしたけど。回転がおかしかったんで「これはまずい！」ととっさにリールを手で押さえたならそんな音がしたんだよ。

◆以前はProToolsIIIを使っているとの話でしたが、今回も同じですか？

○うん。僕は怠け者だからね。

◆その後の作業はどうやって進めました？

○3段階で作業した。失敗に終わった2日半に続く午後半日は収穫もあったけど、彼女は自宅のあるバルセロナにいったん帰らなくてはならなかったんだ。それで日を置いてまたロンドンに来てもらい、5日間で残りのレコーディングとラフ・ミックスを済ませた。その後は僕1人でミックス・ダウンにとりかかったんだけど、彼女がそばにいないとうまくいかないと悟ったんだ。だからもう1回彼女をロンドンに呼んで、ミックス・ダウンに入ってたわけさ。やはり、すぐそばで歌った本人に指示してもらった方がいいからね。エコーやリバーブの量だって、僕だけでも決められはするけど彼女の方がより細かく適切な指示がでるさ。バルセロナとロンドンでテープをやりとりするより、この方がずっといいのさ。そしてこのミックス・ダウンのときに幾つか追加でレコーディングもしたんだけど、その中にはチャールズ・ヘイワードのドラムも含まれているんだよ。

◆チャールズ・ヘイワードのドラムも、自宅スタジオで録ったのですか？

○うん。今回のドラム録りは簡単だったからね。それからはっきりしていたのは、今回必要だったドラムはロックやダンスもののように2拍目と4拍目に必ずビートを刻むものではないということなんだ。そういった音楽とはリズムの中心が違っていることだね。それで僕のフラットの部屋の真ん中で、キックを除いたドラム・キットをチャールズがプレイしたんだ。ここで面白い発見をしたよ。彼が右足で床をキックのペダルのつもりで4分音符で踏みならすようなら、そのプレイは大抵の場合適切ではないんだ。僕たちはもっと複雑なプレイを求めていたからね。

◆M⑥でもドラムの音が聴こえますが、チャールズ・ヘイワードはクレジットされていませんね。○あれは日本の太鼓のサンプリングだよ。このサンプルは気に入って、昔からよく使ってるんだ。そう言えば、だいたい前に清水靖晃さんから僕のドラムは雨の音みたいだと言われたよ。これはイギリス人ドラマーに向かって英語で言ったら相当な侮辱だけど、僕は彼の言わんとすることが分かったし自分でも思い当たる節があるから悪い表現だとはとらえていないけどね。

ジョン・ケージは音楽家として
“より高次なもの”を垣間見せてくれた

◆サンプラーは何を使っていますか？

○GREENGATEも使っているけど、主にSampleCellだね。以前と変わってないよ。

◆ピアノやギター、管楽器などは自分でプレイしたのですか？

○ピアノは全部サンプリングだ。カリンバも今回は大体サンプリングだな。以前は自分の持っているエレクトリック・カリンバを弾いて、ファズに通したりしたこともあるけど。ギターは自分で弾いて、サステインやディレイをうんと効かせたな。そしてギターでもキーボードでも本物でもサンプルでもいいんだけど、エコーなんかをかけてからテープをスロー・ダウンするのはよく使う手なんだ。あ、そうそう、これにはノイズ・ゲートが欠かせないから、今回もノイズ・ゲート・システムは使ったんだよ。

◆何度も聞かれていますと思いますが、そのノイズ・ゲート・システムについて教えてください。

○リズム・マシンやサンプラーの出力をノイズ・ゲートに入れて、その信号をディレイに送るんだ。そしてこのリズムをトリガーにゲートが開くように設定して、さらに別のシーケンスなんかをノイズ・ゲートに通すのさ。こうすると思わぬ音が出てきて面白いんだよ。しかもいったんセットしてしまえば、後は放っておけるしね。その間にコーヒーを入れにいってもよし、電話を済ませるのもよし。戻ってきて良いところを拾えばいいんだ。音楽作りの楽しみの1つはそういう選択にあると思うな。テクノロジーが僕のためにある程度選択をしてくれるのは、実際ありがたいよ。自分が対象物を子細に調べたり監視する必要がなくなるからね。そして音楽作りの良いところをもう1つ挙げるとすれば、ほかのメディアでは自分が絶対やらないようなことができることだ。音楽以外では思いもつかないアイディアが浮かぶんだよね。

◆そうなってくると話はジョン・ケージにつながるように思いますが、あなたは彼とコラボレートしたことがあるそうですね。

○1983年だったかな、彼が70歳になった年にロンドンで行なわれた記念イベントでマイケル・ナイマンと一緒に彼の作品を演奏したんだ。「Speech 1955」という曲ともう1曲、曲名は忘れちゃったけど。ケージは演奏者に譜面とプロセスを渡したけど、プロセスの解釈は演奏者に任せていた。

「Speech 1955」では、マイケルと僕はすべてのラジオを同じ局に合わせてみたんだ。ちょうどコンサート時間帯にブルックナーの良い曲をやると分かったので、それを流そうと考えてね。それで、僕たちはサウンド・チェックでラジオのチューニングを合わせてみた。この時同じ部屋では15人くらいがほかのケージの作品4曲を同時に演奏していたんだけど、この混沌の中でケージはラジオのチューニングが全部そろっていることを指摘し、「それはやってはいけない」と言ったんだ。そこで「譜面にはそういう指示は書いてありませんが……」と言ったら、実に素晴らしい音楽家的な答えが返ってきたのさ。「自分はスコアをダブリングしたことはない」とね。言われてみれば、確かに同じ音は重なってなかった。こうして彼は、僕たちに音楽家として“より高次なもの”を垣間見せてくれたのさ。僕たちも納得して、それぞれのラジオのチューニングを変えたんだよ。この時のコンサートの模様の一部は、ピーター・グリーンハウエイ監督のTV映画に収録されている。タイトルは忘れたけど（笑）。

◆さて今回の旅の主目的はシドニー・ビエンナーレでのインスタレーション作品の出品だそうですね。

が、これはどんな作品なのでしょう？

○シドニーの会場はとて大きくて壁も厚いんだ。そしてこの会場の中にマイク1本とラウド・スピーカーをセットし、両者の間にノイズ・ゲートを据える。こうするとマイクとスピーカーの間でフィードバックが起こるんだけど、これを調節してフィードバックと部屋の共振周波数をそろえたいと思っているんだ。ノイズ・ゲートは、フィードバックが大きくなり過ぎたときにカットする役割を果たす。大きな建物だから、限りなく反響しないようにね。さて、ここに人が入ると、その物理的存在がサウンドを変えるんだ。身体の数によっても違ってくるし、叫んだりささやいたりすればさらに変わる。大声で叫ぶとノイズ・ゲートに引っかかってしまうかもしれない。でもうまくささやけば、その声が歌うように美しく部屋中に響き渡るだろう。そして会場を通り抜けると、居る場所によっても聴こえる音が違ってくる……というのが狙いなんだ。

この作品は2カ月以上もここに設置されるんだけど、ピアノ・レーベルのWWWページ(<http://www.voiceprint.co.uk/piano>)を訪ねてくれたら、もっといろんなことが分かるよ。ミュージシャン・インフォメーションのところで僕の名前をクリックし、「リスニング・ルーム」に入れば音も聴けるようにしておくつもりなんだ。

◆ところで、今年行なわれたパン・ソニックとの6時間ライブはどんな内容だったのですか？

○僕はギターを弾いたんだ。ディレイなどをかけた信号とストレートな信号をアンプは使わずにミキサーに入れ、その2種類の信号を反対側にいるパン・ソニックのミカとヨーコのミキサーに送ってね。2人は僕のプレイに対して何をしてもいいことになっていたから、サウンドからパン・ソニックらしくなったり僕らしくなったりしたんだ。

◆そのライブには、6時間の長さが必要だったのでしょうか？

○6時間かかるかと分かっていなかったら、そもそも始めもしないことってあるんだよね。だからこそ、いつもと違ったことができるんだ。自分がギターで知っていることを、1時間以内にすべて見せなきゃならないような状況ではないからね。1時間のパフォーマンス×6回とは明らかに違うのさ。それに6時間ともなると、昼下がりにから穏やかに始め、夜も更けるにつれカオスが待っているといった変化もある。4時間目には少しペースを落として静かに……なんてこともできるんだ。

◆シドニー・ビエンナーレ以後の予定は？

○予定ねえ……あんまり決まっていんだけど、カントリー&ウエスタンバンドで活動しようかな。いや、冗談じゃないってば。ボーカルがドイツ人のカントリー&ウエスタン・バンドに入っていて、バーにだって出演したんだから。それからすでにレコーディング済みの、7本のエレクトリック・ギターによるオーケストラ“ロンドン・エレクトリック・ギター・オーケストラ”との共演をCDにまとめて発表したいな。レコーディングでは彼らの曲と僕の曲をやったんだけど、それをProToolsに入れてごくごく小さなループを作ったり音を重ねたりの作業をしたいと思っている。まあ今言ったのはあくまでも例で、そうするかどうかはまったく未定だね。